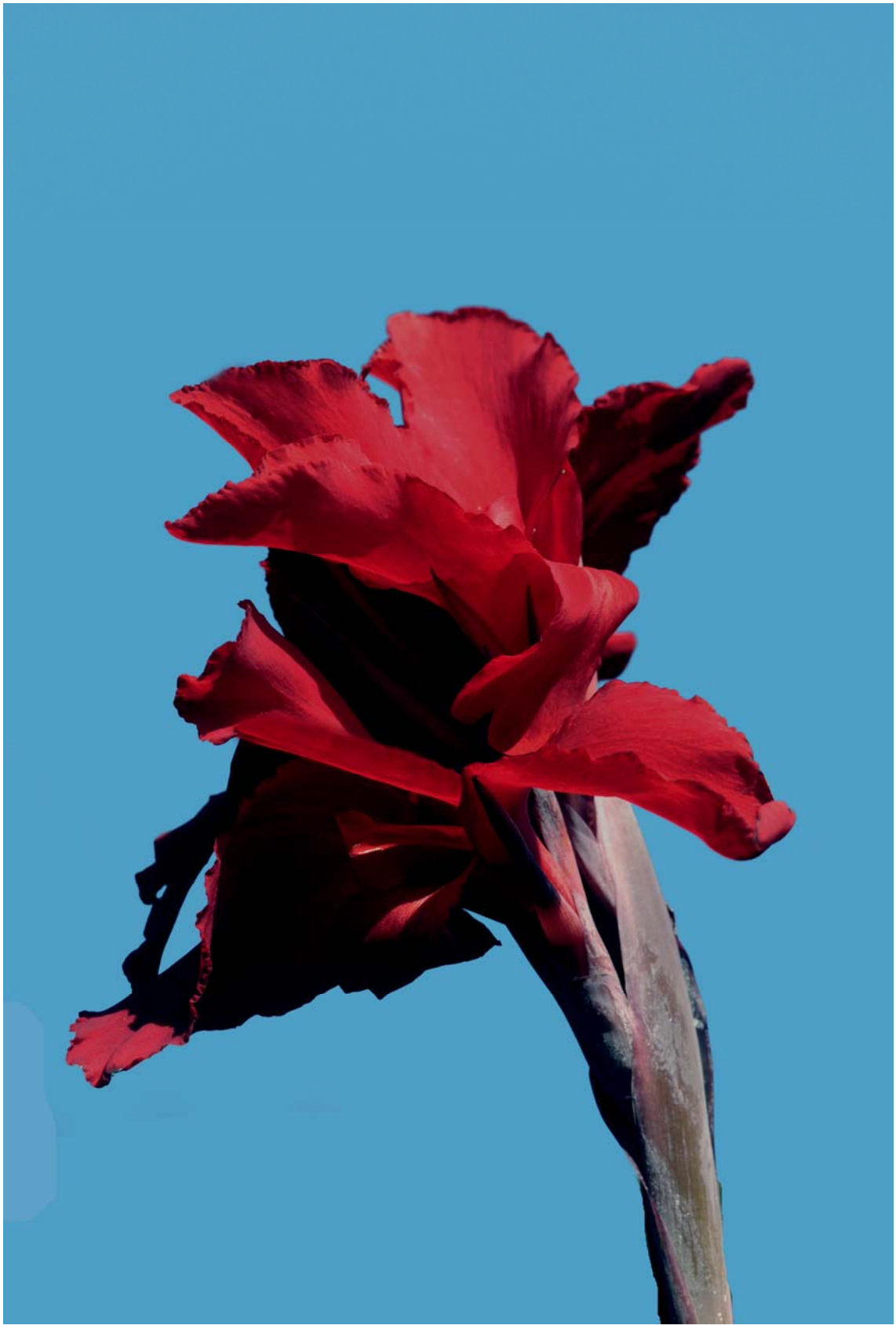
５）カンナ＝曇華／檀得

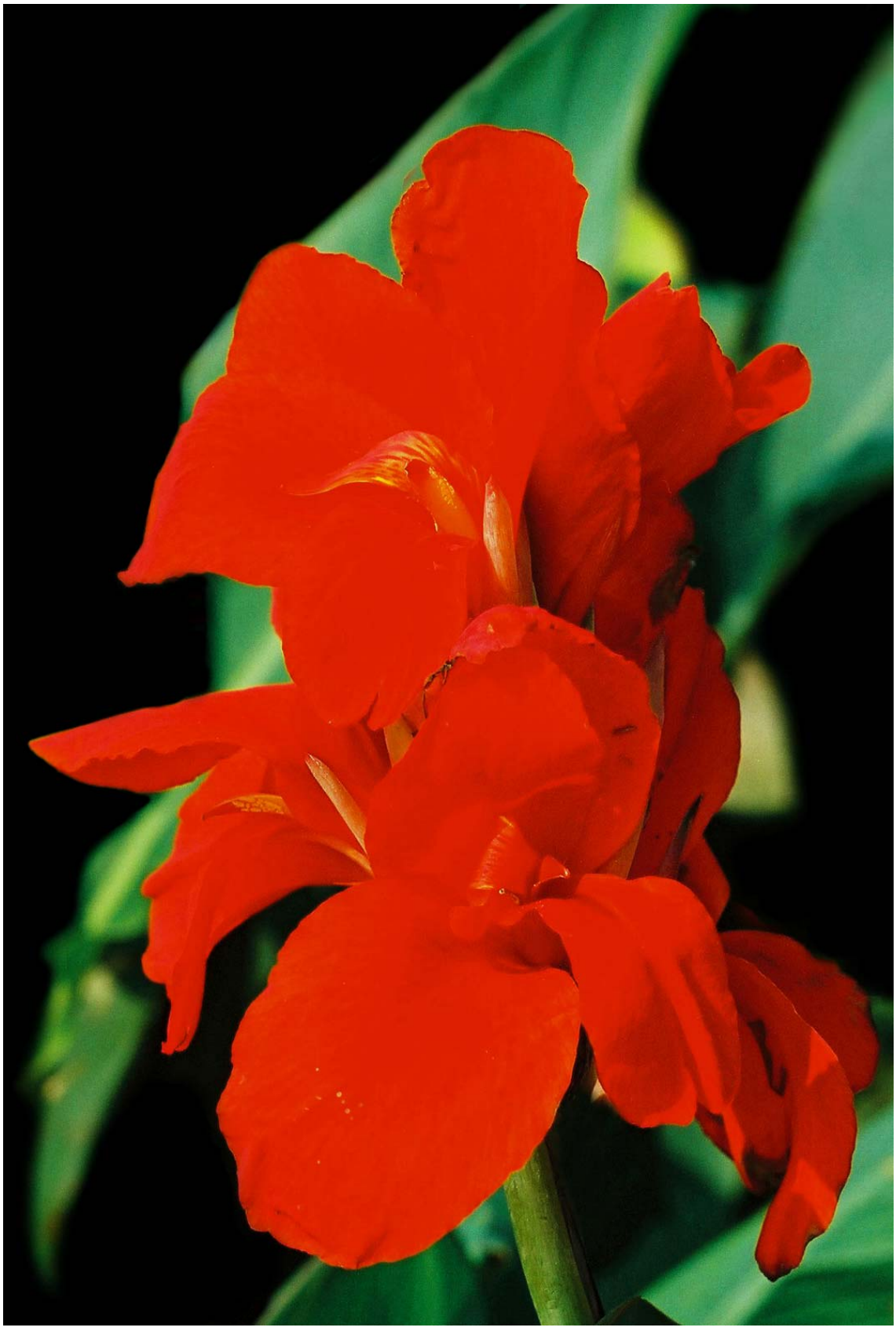
カンナはカンナ科カンナ属の多年草の総称で、世界の熱帯地方から亜熱帯の各地に自生し、カンナの名はケルト語で「杖」を意味する「カナ」に由来するといわれている。日本に分布するカンナは曇華(ドンゲ)といわれる種類で、元禄時代に中国から渡来したものと思われる。現在でも南九州、八重山諸島、御蔵島などに半自生しているが、鑑賞価値の高いものではない。鑑賞用として栽培されているカンナは、この野生種を交配して品種改良したもので、ハナカンナとも呼ばれている。草丈は 1～2m で長楕円形の葉は、バショウの葉に似て長さが 30～50cm にもなり、夏から秋にかけて、茎頂に花径 10cm ほどの大型の花を総状花序につける。花色は鮮やかな緋赤色、濃紅色、桃色、白色、黄色などで絞りの花もある。花弁は 6 枚あるように見えるが、花弁のように見えるのは雄蕊が変化したもので、この内 1 枚だけが雄蕊として機能している。本来の花弁は退化しており、萼の内側に痕跡をとどめる程度である。学名は『*Canna*』といい、このカンナはアシという意味のラテン語で、カンナの茎がアシと同じように空洞になっているために付けられたものである。中国名は前述のように『曇華』だが、『檀得』(ダンドク)ともいわれており、これはインドの仏典に描かれた『檀得山』に由来する。ダンドクの学名は『*Canna indica L.var.orientalis*』で、var 以下の変種名にもその痕跡がうかがえる。イギリスでもカンナと呼ばれ、フランスでは『canne d'Inde』である。別称は茎が空洞になっていることから、テッポウソウとか、ラッパソウなどとも呼ばれている。ラッパソウの由来は昔、葉鞘を取り除き茎だけとし、この先端をつぶして、子供が笛にして遊んだからである。

ビルマに伝わる話では、カンナは仏陀の血から生えたものだという。その昔仏陀の名声を妬んだ悪魔は、崖の上から仏陀めがけて巨岩を落としたが、岩は仏陀の足下で砕けてしまった。しかしその破片が仏陀の足に当たり、滲み出た血が大地にしみ込んで、カンナとして蘇ったというのである。園芸品種としてのカンナは 1,000 種に及び、矮性種で種子ができるフレンチ･カンナ系と、種子ができないイタリアン･カンナ系に大別されている。またこの 2 種類を総称して『カンナ･ゲネラーリス』ということもある。ハナカンナの品種改良は 19 世紀前半より行なわれ、フランス人の外交官アネと園芸家クロジィによるところが大きい。クロジィは南アメリカの品種をかけ合わせ、花の大きいフレンチ系カンナの基礎を作った。また熱帯アメリカ産の中には、根茎に多くの澱粉質を含み、食用になるものもある。

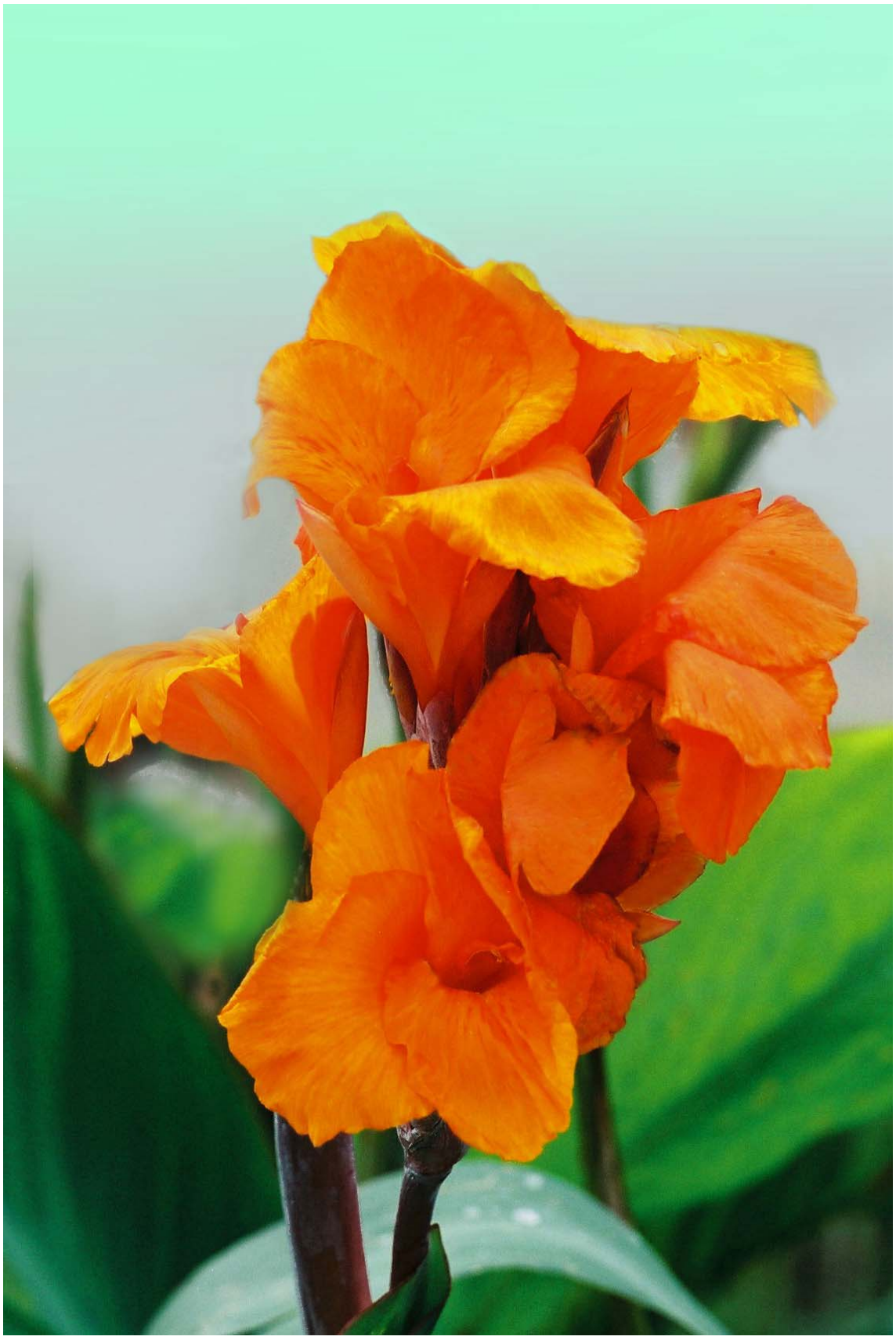
カンナは 6 月頃から咲き初め、霜の下りる頃まで咲くものの、寒さには弱く根が凍ると腐ってしまう。葉が枯れてくる 10 月には根を掘り上げて、乾燥した暖かいところに保管するようにしたい。陽当たりがよく肥沃なところを好み、病虫害には強い。春 4 月頃になったら 2～3 芽ずつに根分けして、径 50cm ぐらいの穴を掘り、元肥えとして堆肥を十分に与えて植えつけるようにする。



濃黒赤色のカンナの花。デジカメではその色がどうしても出なかった(さいたま市緑区)。



濃赤色のカンナの花、花弁に見えているのは雄蕊が変化したものである(埼玉県嵐山町)。



オレンジ色のカンナ(埼玉県嵐山町)。

歩道の隅にあるほんのわずかな地面から、カンナが顔を出して花を咲かせた(さいたま市東浦和)。

こんな紅色のカンナもある。写真では分かりにくいが矮性種である(埼玉県嵐山町)。

見沼たんぼに近い丘陵地で栽培されていた黄色のカンナ(さいたま市緑区)。 目次に戻る